



芍薬の花 (20170505 撮影)

かゆかわクリニック 開院二周年を迎えて

爽やかな五月の風、今日はバイクツーリングを楽しむ多くの人々とすれ違いました。さて、2015年5月1日に開院して丸2年が経過しました。39年サラリーマンを続けて定年退職後に開院することになるとは思いもしませんでした。この2年間で、多くの先輩・同僚・知人の皆さんが応援をして下さいました。お陰様で、看板もない分かり難い場所にも関わらず多くの方がクリニックを訪れて下さいました。

十代の青少年から八十代のご高齢の方々まで、年齢層は幅広く、不眠症から認知症まで、多くの方が利用されています。進学や就職の春は同時に転勤や定年の時期でもあり、全国各地に異動されたり、名古屋に来られたり、忙しい時期でもありました。

進学の夢が叶わず受験生活を続ける若者たち、無事合格して学問に勤しみ始めた若者たち、妊活に入っている青年たち、早期退職年齢になって退職後の人生計画を立て始めている熟年もおられます。

豊かな趣味をお持ちの方も少なくありません。散歩、ロードバイク、バイク、ドライブ、登山、フルマラソン、スキー、スノーボード、古城めぐり、バレイやソプラノ、能や狂言、珍しい旅客機の撮影、写真、映画、演劇、絵画、ガーデニング、野菜作り、

合唱団、豪華クルーザーの旅、スポーツジム、麻雀、ボードゲーム、ゴルフ、卓球、スカッシュ、テニス、ボウリング、バレーボール、フットサル、野球、サッカーなど、インドア派もアウトドア派もおられ、診察の最中に趣味の楽しみを教えてもらうこともしばしばです。仕事が趣味の方は、定年後に荷下ろしうつ病になる心配があります。趣味が楽しめなくなるのは、うつ病などの初期兆候です。クリニックの面接場で趣味を話題にするのは、単なる雑談という訳ではありません。

糖尿病、緑内障、高血圧、肥満、などの身体疾患をお持ちの方もおられます。メンタルクリニックは心だけを診て、身体の方は身体医にお任せというスタンスでは不十分だと思っています。脊柱管狭窄症、頸椎症などの整形外科疾患で、痛みやしびれがあって、スポーツが楽しめなくなる場合もあります。一方、糖尿病、肥満、睡眠時無呼吸症候群で、減量が必要となり、一日1万歩の散歩を雨の日も風の日も続けている方もおられますが、うつ病になると散歩をする意欲もなくなって、生活習慣病が悪化します。整形外科、内科との連携も心の健康には不可欠となっています。

七百万人を超える認知症、わが国の大問題です。親御さんの認知症や高齢社会に伴う介護問題も切実で、ご本人の診察は二の次で、親御さんのケアについて、適切な施設や訪問看護について一緒に考えることもしばしばです。お子さんの不登校や引きこもり、精神疾患なども相談事の一つで、アドバイスを求められることもあります。

人間は、全て寿命があります。医師も例外ではありません。良い精神科医が五十代で癌で亡くなられたこともあります。敬老パスをもらう年齢になるといつまで診療が続けられるのか、という思いが出てきます。そんな心境を察してか「私が生きている間は、死なないでくださいね」と妙な激励をされる後期高齢者の患者さんもおられます。

出会いと別れがあるのは人生の常ですが、街中の小さな診察室にも出会いと別れがあります。一番望ましいのは、病を克服して通院治療終了となることです。次に再発や再燃を防ぐことです。もっとも難しい認知症はなるべく進行を遅らせることです。

お互いの年齢によって患者さんの生きられる時間と医師の生きられる時間には、分離があります。たった一回でも数か月でも数年でも診察室という場で、心の病からの回復、睡眠障害の改善に、微力でも寄与できればと思いながら二周年を迎えています。

人生は海図のない航海に譬えられます。仏蘭西の公爵ラ・ロシュフコーの箴言集の中に、以下の言葉があります。この十余年座右の銘としている書です。

（「ラ・ロシュフコー箴言集」岩波文庫）

年齢を重ねた医師は数多くの経験と豊富な知識があり、なんでも知っていて診療も的確で熟練とかベテランとか思われがちですが、私はそうは思えないのです。

**ラ・ロシュフコー『われわれは生涯の様々な年齢にまったくの新参者としてたどりつく。だから、多くの場合、いくら年をとっても、その経験においては経験不足なのである。』**



2017年5月5日 かゆかわクリニック 開院二周年を迎えて

彌川 裕平

古里の実家の庭に、芍薬の花が咲き始めていました。当帰芍薬散は認知症の周辺症状のお薬に、芍薬甘草湯はこむらかえりのお薬になるそうです。生薬を医療に生かす漢方の知識が乏しいので、漢方に詳しい友人に教えを乞いながら、これから勉強しようと思っています。